

特集 中学生・高校生の新聞活用教育に迫る

社会問題を複眼的に捉える技能を育てる

海城中学高等学校（私立・東京都）その2

独自の総合学習「社会」に 30年前から取り組む

東京都新宿区にある私立中高一貫の男子校、海城中学高等学校では、「地歴公民」の系統的な社会科学の時間のほかに、総合学習「社会I・II・III」という独自科目を設けている。社会と世界に目を開き、自発的、積極的に社会問題に気が付く力を育むのが目標だ。3年次での「卒業論文」完成に向けて、中学1年次から文献調査をし、取材やフィールドワークなどの活動を通してテーマを深めていく。その際に活用する教材の一つに、新聞ダイジェストがある。今年度の中学1年では8クラス全員に毎月1部を配付し「社会I」の授業で用いている。

1年1組を担当する南平春太教諭の授業では、生徒に現代社会の問題を複眼的に捉えていく姿勢を意識づけさせたいと、「表現の自由」を題材に授業を展開した。「表現の自由」の理解を知識レベルにとどまらせるのではなく、社会のどのような事象と結びついているかを見出すスキルを身につけるのがねらいだ。

「表現の自由」に関する記事を探そう

南平教諭は、授業の冒頭、「僕らは、個人の思想や意見を外部へ表明する自由、つまり表現の自由を持っていると言われるが、本当にそうだろうか？」と投げかける。表現の自由は民主的な国家を作るために必要なものだが、同時に他人の権利との調整も考えなければいけないと説く。

「もし、君たちがLINEを自分以外の誰かに見られたらどうする？」「私の足が遅いことを、大声で学校中に言いまわるのは名誉棄損ではないか？」など、生徒の身近な関心事に引き付けて話すので、生徒たちもぐいぐい引き込まれていく。その後、「立川反戦ビラ事件」や「北方ジャーナル事件」の最高裁判決文を読解しながら、表現の自由とは何かを考えさせていった。

授業の後半は、新聞ダイジェスト5月号の記事掲載ページから、「表現の自由」に関する記事を探し、「見出し」と「掲載紙」「内容のまとめ」をプリントに書きだすワークに当たった。「今、我々が生きているこの世界ですら表現の自由をめぐっているいろいろな争いが起き

「上海に住んでいたことがあるので、中国の話題は気にしている。それで TikTok の記事に関心を持った」（渡邊薫さん）。「表現の自由について、授業で深く学べたのでよかった。社会Iは歴史や公民分野などいろいろな要素が総合的に学べると思う」（小泉類さん）。「表現の自由の大事さを深く考えてことはなかったけれど、いろいろな事件があると知って、生活と関連しているのがわかった。表現の自由と公共の福祉がかみ合わないこともあるんだと気づいた」（坂田誉樹さん）。

「君たちはネットで新聞を読むとき、1つの記事しか読まないでしょう。そうすると、いろいろな問題の背景に大きなテーマがあることに気づかない場合がある。一見別々に見える事件の裏にも、実は大きな問題が背景に隠れているのだという例を、新聞を通じて勉強してほしい。逆に、一つのテーマでもいろいろな事件や問題に発展する可能性がある。みんなが興味を持った分野が、いろいろな話題に転換しているかもしれない。新聞をパラパラ見るだけでも、気づけることがある。気づくためには知識を付けないといけない。系統的な社会科学と、総合学習の社会を並列に学ぶのはそのため。」

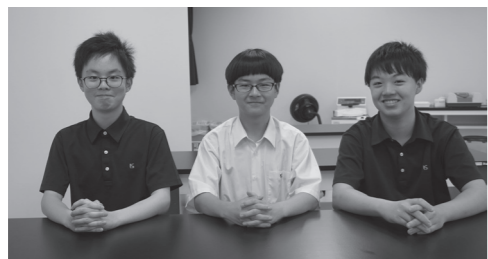
新聞をきっかけに

どこまで世界を広げられるか

1組の生徒は、この日の授業をどのように受け止めたのだろうか。感想を聞いてみた。

「今日の授業では、興味のない分野でも新聞に目を通せば、自分の興味・関心に結びつくかもしれないと伝えたかった。中1でレポートを書かせると『平和な社会を実現するには』など視野が広すぎたり、逆に狭すぎたりする生徒がいる。自分の考えが他の話題とリンクしているかもしれないと認識させるためにも、新聞は活用していきたい」（南平教諭）。

ただし、新聞や新聞ダイジェストはあくまで教材だ。南平教諭、そして共に「社会I」を担当する屋敷浩伸教諭、名倉一希教諭は「新聞の読み方に慣れさせたり、社会的興味・関心を高めるために新聞ダイジェストを教材としても使うことができる」と話す。新聞を読むことを目的にするのではなく、社会に目を開く手段のひとつと捉える姿勢は、多くの学校のヒントになるのではなかろうか。



（左から）坂田誉樹さん、小泉類さん、渡邊薫さん



中学1年の「社会I」を担当する社会科の名倉一希教諭（左）、南平春太教諭（中）、屋敷浩伸教諭（右）

編集・取材 長尾康子



（上）積極的に手を挙げて発言する生徒が多い。
（左）新聞ダイジェスト5月号から記事を探す。